

フランスでの留学経験

内川 瑛美子

私はお茶の水女子大学の博士課程の3年生の時に湯浅記念年子奨学金のサポートをうけて、フランス ストラスブールにある IGBMC (*Institut de Génétique et de Biologie Moléculaire et Cellulaire*)という研究所に研究留学をしました。IGBMCは世界の中でも転写関係の研究で非常に有名は研究所であり、また構造解析研究においても世界でトップレベルに位置する研究施設です。

私は Dr. Dino Moras 研究室でスーパーバイザー Dr. Anne-Catherine に指導をうけ、転写過程におけるタンパク質とノンコーディング RNA の相互作用について、X線結晶構造解析の手法を使って研究を行いました。研究室の雰囲気は非常に自由で、先生と生徒の関係も非常にフレンドリーなものでした。研究への取り組み方も、ディスカッションを主体にするもので、日本との大きな違いを感じました。Dr. Anne-Catherine のチームでは、メキシコ人の博士課程の学生、フランス人のテクニカルスタッフと共に研究を行いました。Dr. Anne-Catherine からは、テクニック、実験の進め方、データのまとめ方など、多くのことを学びました。メキシコ人の博士課程の学生とは毎日、日々の研究のテクニカルな問題に対して話し合い、研究をどういう風に進めていくか意見交換をし、日々切磋琢磨しました。上手くいかないとき、結果がでてうれしいときと日々の生活の中で多くのものを共有することができました。

英語もフランス語も流暢に話せなかった私ですが、日々の研究生活のなかで、自分の意見を伝えたい、周りの情報を理解したいという気持ちから、最終的には、英語やフランス語を使って楽しく研究生活、学生生活を送ることができました。

研究所の博士課程の仲間は世界各国から集まっていました。毎日、フランス、イタリア、ルーマニア、スコットランド、レバノン、ドイツ、インド、ロシア、メキシコ、カメルーンなどから来た友人と昼食をとり、雑談をする中で、最初はそれぞれの国の文化やものの考え方の違いに戸惑うことが多くありました。共感できることもあれば、驚くこともありました。しかし、多くの文化が混在するフランスで、それぞれの考え方が尊重されて、共存していることを実感し、素晴らしいなと思いました。また、多くの学生が日本の文化、社会に興味を示し、質問をしてくるのですが、今まで考えたこともないことへの質問が多く、自分が日本の歴史、文化に関して知らないことで、客観的にヨーロッパと日本を比較して、日本文化の相違点を説明することができず歯がゆい思いをしました。日本人として、日本社会、文化について関心を持ち、自分の意見を持つことが大切であることに気付かされました。

フランスでの留学経験は研究におけるスキルアップ、研究への取り組み方の違いを学ぶだけでなく、フランスでの日々の生活、友人との交流から、本などの情報からは得ることのできない文化の違いなどを知ることができ、多くのことを考えさせられました。この留学はこれからの私の将来の大きな糧となると確信しています。

このような貴重な体験の機会を与えてくださったお茶の水女子大学、先生方、湯浅年子記念特別研究員奨学基金、日仏理工科学会、フランス政府に、心から感謝致します。